

会員の広場



「狭山茶」の主な生産地は、どこ？

小長井 孝（東京）

「色は静岡、香りは宇治よ、味は狭山でとどめさす」は、埼玉県は入間市を中心に各地で唄われてきた狭山茶手もみ茶作りの戯れ歌です。お茶（緑茶）に関心のある皆様、狭山茶は狭山市（入間市に隣接）が主生産地、と思われていませんか。これは誤解だと思いま

す。狭山茶の大部分は入間市で生産されています。狭山市も作っていますが、耕地面積が狭く生産量は入間市の1/4程度です。

日本の三大銘茶といえば、静岡茶、宇治茶、狭山茶でしょう。お茶は南方系の植物で寒さが苦手です。先人の弛まぬ努力によって耕作地は北上し、大規模に狭山茶を生産している入間市は、お茶の北限と言われています。蘆北茶（やぶきたちゃ）という銘柄がよく知られていて、狭山茶も大半が蘆北です。名前の由来が直截的で愉快です。「蘆北茶」は「やぶの北側にあつた茶樹」という意味で名付けられました。明治41年静岡県有渡郡（現静岡市駿河区）の篤農家杉山彦三郎が、自己所有の竹藪を切り開いた茶園で蘆の南と北で茶樹

を育てたところ北側の茶樹が優れていることを発見したのがはじまりで、「嘘のような本当の話」。当初は、なかなか普及しなかったが、昭和20年に静岡県の奨励品種に、同28年には農林省の登録品種となったことで全国に拡がりました。味が良い・霜に強くて生育が早い・生葉の収量が多いなどの優れた特性が評価され、今では日本の煎茶生産量の7〜8割も占めます。

狭山茶主生産地の入間市では、お茶への関心が高く、特に手もみ茶作りが熱心に取組まれ、品評会で日本一連続13連覇という偉業を達成中です。市役所中庭でお茶が栽培され、毎年5月2日八十八夜新茶祭りで茶摘み体験や新茶の天ぷらの試食会等があり、大勢の市

民や見学者で賑わいます。入間市で作るお茶がなぜ狭山茶と言われるのか……。市の南側に狭山丘陵があり、その周辺は「狭山」と呼ばれ、江戸時代末頃から茶作りが始まり今日に至っています。現在広大な茶畑が展開され、霜対策用に無数に林立する防霜扇は、青々とした茶畑と良いコントラストを成し、必見の価値があります。

1町5か村の合併で生まれた「狭山」市の名称は、今風で言うところ「狭山」茶からパクリされたのかも知れません。今年選挙の年、50年以上前の類似の連想ですが、「公明選挙」と書いたのぼりが随所に見られたのが、突如姿が消えました。とある新興宗教を母体とした新たな政党が誕生した時でした。